

## 中学部一年B組

ミネソタとテキサスの違い

布田 朔汰朗

僕は今夏、北にあるミネソタ州からテキサス州に引っ越してきました。ミネソタ州には湖がたくさんあり、冬には山のように雪が積もりました。それなので、テキサスの暑さと環境の違いにはとても驚きました。そこで、この二つの州の違いについて書こうと思います。

まず、テキサスの家に来て最初に気付いたことは、地下室がないことです。ミネソタの家には地下室があることが非常に一般的で、また好まれています。

次に気付いたことは、虫や動物の体のつくりや種類の違いです。テキサスでは家の中や外にゴキブリやアリがいたり、またヤモリや蛇なども見かけますが、ミネソタではほとんど見られませんでした。それはおそらく、ミネソタは一年中寒いことが原因だと思えます。テキサスのリスの方が小さいことにも気付きました。ミネソタは冬がとても寒いので、小型動物は寒い冬に備えて秋に食料をたくさん食べているので、とても太っていました。

もう一つ気付いたのは、テキサスにはアジア人が多いことです。現地校にもベトナム人や中国人がたくさんいます。ミネソタでもアジア人はいましたが、それよりもアフリカのソマリア人やエチオピア人が圧倒的に多かったです。通っていた現地校の生徒の六割くらいはアフリカ系の人でした。

でも、やはり一番衝撃的だったのは気温の違いです。ミネソタではジャケットが必要な季節でも、テキサスでは半袖でも寒くありません。暑いことにはまだ慣れませんが、両方住みやすい場所だと思います。これからミネソタとテキサスの違いを見つけていきたいです。

## 私の家の猫

平井 優衣

私の家には「おもち」という名前の猫がいます。二〇二二年の一月に家族に迎えました。

初めて出会った時に、母が「おもち」に一目惚れしてしまい、その当日に家に来ました。まだ四カ月と少ししかたっていない頃の「おもち」は、しつぽの茶色の毛以外はほとんど真っ白でもかわいかったです。

「おもち」はラグドールという種類の猫で、一年もたてば顔の茶色のハチワレや体の模様がはつきりしてきました。幼く、まだ白い毛が多かった「おもち」も、今の色が付いた「おもち」も、どちらもとてもかわいくて日々癒されています。

およそ二年前の二〇二三年の夏、「おもち」は私たち家族と一緒にヒューストンに来ました。日本の自宅からの移動の車や新幹線の中で「おもち」は慣れない環境でもとても緊張していました。羽田空港では飛行機の動物用の貨物室へ行くための預ける場所で「おもち」と離れ離れになる際に、母は涙ぐんでいました。飛行機の中でも母は「おもち」を心配して涙を流していたのをよく覚えています。

二〇二五年、最近になって、「おもち」の様子が以前より少し変化してきたことに気が付きました。前よりも狂暴化することや、ごはんの食べ残しの回数が多くなったりして、母は怒っている反面、心配もしています。どこか調子が悪いのかとも思っていました。体重の変化などはなく、とても不思議に思っています。

「おもち」は外が好きで、よく母は「おもち」と一緒に裏庭に出ています。「おもち」は特にトカゲを見るのが好きで、トカゲを見つけると、今にも飛び出して行きそうになるので、よく行動を見ておかなければいけません。

これからも「おもち」が快適に過ごせるように、体調や環境の管理をしながら見守りたいと思います。

僕は、今年の夏休みに、日本に一時帰国をしました。日本に帰ってすぐ、近くの中学校に通い始めました。初めての日本の中学校で緊張しましたが、同級生の人たちが優しくしてくれたので、とても楽しい日々を過ごすことができました。部活動では陸上部に参加させていただきました。陸上部の臨時顧問が外国の方で、顧問が不在の日は通訳をしたりしました。学校へは一ヶ月ほど通い、その後、残りの日は旅行へ行ききました。

旅行では、まず、大涌谷に行きました。大涌谷とは、神奈川県箱根町にある活火山地帯です。そこへはゴンドラに乗って行きます。ゴンドラから見える景色は壮大で、モクモクと煙が上がっていました。大涌谷駅に到着して写真を撮ったり、景色を見たりした後、大涌谷の名物である黒たまごを食べました。この黒たまごは大涌谷にある温泉で作られているようで、大涌谷の温泉にある成分と卵の殻が化学反応を起こして黒くなるそうです。味は見た目とは違いとてもおいしくて驚きました。いつも食べているゆで卵とは少し違うおいしさがありました。

ゴンドラの各駅にはスタンプ台があり、箱根スタンプ帳(五百円)に各駅のスタンプを集めるものでした。僕もおこづかいでスタンプ帳を買いました。他の駅には観光名所があまりなかったのですが、スタンプをどうしても制覇しなかった僕は、全ての駅で降りてスタンプを完成させました。途中、家族と離れて一人で駅に降りてスタンプを押しに行ったり、アメリカではなかなかできない体験をしました。

その後、大涌谷から東京へ特急で向かいました。僕は、東京の空港へは何度か行ったことがあります。東京観光は初めてでした。

東京へ行ったなら、まずスカイツリーを見てみたいと、スカイツリーの近くのホテルに泊まって、スカイツリーのイルミネーションを楽しみました。次の日、スカイツリーの展望台に上りました。エレベーターが四つあって、一つ一つ季節を表しているそうです。展望台に着くと素晴らしき見晴らしで、学校、お店などが小さく見えました。

その後、雷門へも行きました。こちらにも観光客の方々でいっぱい、暑くて歩くのも大変でした。妹は全然歩かず、参拝しておみくじだけを引いて帰りました。おみくじの結果は、大吉三つと吉二つでとても良い結果となり大満足で帰りました。

初めての東京観光はいっぱい歩いて疲れてしまい、まだまだ行ってみたい・見てみたいところもありますが、良い思い出になりました。一番のお土産は五百円で買ったスタンプ帳です。

昔の友達とのバースデーパーティー

藍 聡太郎

僕は、十月十一日に、小学校の時に友達だったゼインのバースデーパーティーに行きました。

久しぶりに会うと思うと、ちよつと不安でした。しかし、もう二度と会うチャンスはないので行くことにしました。バースデーパーティーは、グレイトビッグゲームショーという所になり、そこに行ってみると、大きく変わった友達にびっくりしました。ゼイン以外にも他の昔の友達もいました。そして、みんなが揃うと、ゲームが始まりました。ゲームは、ほとんどがクイズショーみたいなので、見た目よりも、もつと面白かったです。クイズ以外のシューティングゲームや、ブロックを積み重ねるゲームも楽しかったです。

その後、みんなで近くにあるピザ屋さんに行って、みんなピザを食べました。そして、僕のマイクラフトのレゴが入ったプレゼントをゼインにあげ、ゼインはみんなにギフトを配って解散しました。パーティーが終わった数時間後、ゼインがプレゼントとして送ったマイクラフトのレゴを建てた写真を送ってくれて、行ってよかったなと思いました。

あのバースデーパーティーは、日本に帰っても忘れられない大切な思い出になりました。

## 宇宙セミナーで学んだこと

小田嶋 海

先日、ヒューストン日本語補習校のイベントで宇宙セミナーを見学しました。このイベントは、実際に宇宙に行ったJAXAの宇宙飛行士である大西卓哉さん(米国クルードラゴン宇宙船運用十号機でISSに行き、宇宙に約二百六十日滞在した)がISS、ロケット、宇宙、宇宙船での生活などについて話してくれました。今回はこのイベントで僕が感じたことや面白かったことを三つに分けて説明します。

一つ目はISSについてです。僕が感じた理由は、地球の上空約四百キロメートルを秒速約八キロメートルで回っているということです。したがって、一日に十六回も地球を回っているのです。そのため、大西さんは朝と夜が十六回あるので、常に時計を身に着けていると言っていました。また、大きさはサッカーコート場くらいあり、多数の国の宇宙飛行士たちが生活しています。様々な国とコミュニケーションがとれるという点も良いなと思いました。

二つ目はISSの生活についてです。機内は無重力なので、地球とは全く異なった生活をしていると大西さんは言っていました。そこで、僕が面白く感じた無重力生活を三つ紹介します。

一つ目が、水を大切にしているという点です。宇宙では水を確保することが難しいため、節約をしているそうです。例えば、歯を磨いた後の歯磨き粉を直接飲み込んだり、尿を浄水して、飲み水に変えるということもしているそうです。僕も将来は使ったお風呂の水を洗濯するときの水に再利用するなど節約し、ISSでの生活を見習いたいです。

二つ目は、毎日二時間も運動をするという点です。理由は無重力の世界だと歩かなくてすむので、ほとんど体を動かさないので、大西さんは、それにしても二時間はとても長いなど僕は思いましたが、大西さんは、とても気分転換になったと言っていました。

三つ目は、液体が球状になることです。無重力なので液体はこぼれないそうです。また、自分も体験したいなと思いました。

そして、僕が関心を持ったことの三つ目は、技術を進化させるという

ことです。大西さんは最後にこう語っていました。「今、人間は月より遠い星に行くことができない。しかし、技術が進化すれば必ず行ける。その技術が進化するのには僕らの世代ではなく、みんなの世代だ」。僕はこの言葉に、「もつと頑張らなくてはいけない」と心を動かされました。僕はこの宇宙セミナーで自分の人生においてとても大切なことを学んだと思います。僕は将来、大西さんのように世界で活躍する逸材になれるよう、努力していきたいです。

## 戦争と国民

石原 淳平

戦争中は、国民が一緒に行動する方がよかったですと思います。みんなが支え合って生きぬくという意味です。

「大人になれなかった弟たちに……」の中に出てくる、飢えと恐怖の中で必死に生きようとする主人公「僕」と家族。太平洋戦争で亡くなった弟、ヒロユキへの悲しみ。これは、戦争で多くの人が感じた気持ちだろう。その辛く苦しい思いを少しでも軽くするのが国民の願いだったのでしよう。そう感じている人がいるから、農家のおじいさんや親切な人々は主人公の家族に協力してくれたのだと思います。

一方で、疎開した事で配給がなくなると、以前より食糧が難しくなってしまうので、元いた場所でみんなの力を借りて生きるのが、良い選択肢だったのではないかと思います。ミルクの配給もあり、弟は死なずにすんだかもしれないからです。暗い電気の下で、小さな口に綿に含ませた水を飲ませたという悲しい思いを背負わずにすんだかもしれません。

戦争をするたびに、国にも国民にも、何もいいことは起きません。戦争に行っている人の家族、戦争の中で暮らしている人、その家族だけでなく、友人、知人……。国民がみんな恐怖や飢え、そして悲しまなければなりません。それでも今も戦争はあります。戦争をやめて、平和な世界になってほしいです。

学校の制服は必要か

伊藤 寧美

私は、学校の制服は必要ではないけれど、あったほうが便利でうれしいものだと思います。制服には良いところも悪いところもあるので、「絶対に必要」とは言い切れませんが、なくなると少し困ることもあると感じます。

実際に、私は週に一度、日本語補習校に通っています。そこには制服がないので、毎週「どんな服を着よう」と考えるのが大変です。「この組み合わせはかわいいかな」とか、「私に似合うのかな」とか、そうやって迷い、迷っているうちに時間がたってしまうこともあります。その度に、「やっぱり制服って便利だな」と感じます。

また、制服を着ると「これから学校か」という気持ちになります。気が引きまります。みんなが同じ服を着ていることで「学校の仲間」という一体感も生まれます。個人で好きな服を着ていたら、あの人はセンスが悪いとか、同じ服をずっと着ていたり、セールで見た安くなっている服を着ているのではないかな等、周りから言われてしまうこともあるのではないかと思いました。全員が同じ制服を着ていると、そのようなことを人に言われることはないと思います。私は制服のデザインもかわいく好きです。

しかし、制服にも問題があります。一番大きいのは値段が高いことです。買うときにお金がかかるし、成長してサイズが合わなくなると、また新しく買わなければなりません。私も実際に何回もサイズが合わなくなつて、毎年買ってもらっています。そして、制服は季節に合わないこともあります。夏は暑くて動きにくいこともあります。

この様に、制服には良いところも悪いところもあります。だから私は、制服は「必要とまでは言えないけれど、あると安心できて便利なものだと思います。もしもつと動きやすくて、値段の安い制服ができれば、みんなが喜ぶと思います。そしてサイズ変更があっても気軽に買えると思います。制服は、私にとって「なくてもいいけど、あったらうれしいもの」です。

書くことがなかった……

松本 緑也

僕は今、大ピンチです。作文に書ける事柄がないのです。だから、僕は最終手段を使います。それは、何を書こうか悩んだ一週間の心情と行動を書くだけという至ってシンプルかつ少しズルいようなことです。

事の始まりは先週の土曜日。国語の宿題で自分の好きなように作文を書くことになりました。そこで、僕は物語や日記などを書こうと考えました。いざ家に帰り、早速取り掛かろうと鉛筆を取り出し、いざ。「何を書けばいいのかわからぬ……」。物語を書こうとしても「なんだかおもしろくない……」。日記を書こうとしても「書くことがない……」。

すっかりやる気をなくした僕は別のことをやり始め、気が付けば一週間立っていました。「作文が終わってないだろ!!」幸い、その宿題は二週間かけて終わらせるものだったので、もう一週間あるが、「このままでは、先週と同じように何も書けずに終わってしまう」そう思った僕は、こうしてこの作文を書いているのです。

僕はいつも、お題のある作文なら、チャチャッと終わらせています。しかし、お題がない作文はなかなか難しく、お題を決める時間で大半の時間を使ってしまう。僕は今回初めて、自由の不自由を感じました。様々な選択肢を与えられると一つに絞るのが難しく感じます。そんな時に自由の不自由を感じるのではないのでしょうか。随分と脱線しましたが、最後に、とうか今、これを書いているとき、僕は、「こんな内容だったけれど無事に終わってよかった!」と思いました。

何とも言えない短い旅行

蒲 佳珍

これはとても短い旅行だった。二日半のとてもとても楽しくなくて、そして、楽しい時間を過ごした。

その二日間の中に、私は自分の家族、母の友人の家族、それと知らない人の家族（不審者達）と一緒にオースティン、A&M、ブルーベルアイスクリームファクトリー、それとサンアントニオに行った。楽しかった理由はあつたと思う。ただ単にハッキリと思ひ出せないだけ。だからといって悪いことばかりでもない。ちびっ子達は、はしゃいでいてかわいかった。でもなんだろう、そこまで楽しくなかったな。

一番最初に行った場所は、ブルーベルアイスクリーム工場だ。正直に言ってそこに行って無料アイスを食べて終わりっていう感じだった。一つの大きなスクープが一ドルだった。しかもアメリカ軍隊に入っていたか、入ってるのなら無料である。おいしい無料アイスはもつと格別だった。そこに三十分ぐらいしか滞在しなかった。結構つまんなかったのだから早く帰れて良かったと思う。

セカンドストップは、ジョージブッシュライブラリだ。一番つまないやつだった。そこは普通のミュージアムとほぼ同じだった。元々あまりミュージアムは好きじゃないので、もちろんジョージブッシュライブラリは好きではなかった。そこはA&MにあるのでA&Mに行ったといつてもいい気がするからそういうことにする。

三つ目のストップはサンアントニオである。一番楽しくて一番疲れた時間だった。みんなが大好きなアラモにも行った。ビックリするだろうけれどアメリカ、テキサス州にきてもう四年たつけれど、まだ一度もアラモに行ったことがないのだ。だから、今回が人生初めてである。その有名な川にも初めて行ったので、結構楽しかった。

楽しくなかった主な理由は、母の友人の夫があまり好きではないからだ。あの人が話してくる話はなんかつまらないし、頑固だし、無視してくる。そうやって扱われるのはあまり好きではない。

ご飯は結構おいしかったと思う。ともかく、不満はない。うちは子供好きなので、二人のちびっ子達はとてもかわいかった。

一見、この旅行は長そうだけれど、実際はたった三日しか旅行に出なかった。短くて嬉しくて、同時になんか悲しい気分もした。結果は、無事に家にたどり着いたので、この旅行はいい旅行とする。

## 中学生活、初めての運動会

松永 颯真

先週、一年ぶりの運動会がありました。中学部になって初めての運動会である今年は、いろいろな係の中から何かを担当するので、どの係にしようか迷いました。最初は審判になるうと思つたのですが、希望する人が多く、ジャンケンに負けてしまったので、残っていた賞品係にしました。

そして当日、去年まではプレイする側でしたが、今年は運営側をするので、早く起きる必要があります、家も少し遠いので、六時台に起きることになりました。すぐ眠かったので若干行きたくありませんでした。でも、行ってみたら楽しいと思ひながら車に乗りました。早起きして眠かったので、補習校に着くまで車の中で寝ました。

補習校に着いて運動場に行きました。人があまりいなかったのので、友達とお喋りしていました。人が集まってきたので運動会が始まりました。競技は小学部から始まるので運動場の真ん中に行き、旗を持ちました。競技の進行を見ながら、走り終わった人にはシールをあげました。小学部は人がすごく多いので、渡すのが大変でした。それ以降の競技はシールを配らなかったので、友達と一緒に競技を見ていました。

小学部が終わり中学部、高等部の競技が始まりました。最初の競技、大玉転がしでは何回かボールが落ちたので白が負けました。悔しかったです。

そして、待望のリレーが始まりました。賞品係の自分は、旗を持たないといけないので、運動場の真ん中に行きました。真ん中からは別視点から見ることができるので楽しみにしていました。女子、男子、女子、男子の順で中一から高校生までのリレーでした。中一も凄く良かったけれど高校生からの速さは凄く、迫力満点でした。

それなので賞品係になって良かったと思ひました。最初はジャンケンに負けて引き受けた係だったけれど競技を間近で見られたり、友達とたくさんお喋りできたり、良いことがたくさんありました。来年も賞品係になるうかと検討しています。

出木杉下さん

井澤 柚葉

皆さんは法廷ドラマや刑事ドラマを見たことはありませんか。私は幼少期を刑事ドラマキッズとして過ごしました。学校から帰宅するとすぐにリモコンを手に取り、チャンネル5の相棒を見ていた記憶があります。相棒は私にとって憧れでした。特に警部の杉下さんを心から尊敬して、憧れていました。母が「テレビに魂を抜かれたよう」というほど子供なりに真剣に見ていました。小一や小二ぐらいの私はすべてを理解していたわけではありません。だからこそ、ストーリーよりも刑事たちに目が行ったのです。杉下さんの「茶技」を真似しようとする、お茶が私の言う通りになってくれなかったのを覚えています。スルスルとカップからこぼれていくお茶を見つめる私の目から涙がこぼれていました。

何が一番残念なのかというと、私はこういうミスを犯したあとは、すぐ諦めて他に移る子供だったことです。杉下さんの、あの亀を散歩につれていけそうな耐久力、宿題が終わったという私の嘘を簡単に見抜けそうな洞察力、これらをうまく駆使する姿にもう皆が惚れるでしょう。そんな大げさな、と思うかもしれませんが、しかし、あなただつて相棒を見てみれば、ずばり、すぐ杉下さんの推し活を始めるでしょう。もちろん、幼い頃の私の目にもこのかっこいい杉下さんの姿が映っていました。「私も杉下さんになりたい。」という願望を心に秘めていました。今、物心ついたあと、私は理解しています。私はもちろん杉下さんになれない。これには二つの理由があります。

一つ目の理由は、私は記憶力がとてつもなく悪く、頭の回転が遅いからです。年を取るにつれて、私の記憶力もかすれていきました。頭のギアが錆びてきて、グリースをなくしました。ゲームのルールなどは友だちと遊ぶときの最大の敵です。いくら説明されても情報が脳から逃げてしまふのです。五分前に話していたことを忘れる私が警察官になったら、何が起ころか想像できません。証拠現場に行ったら、きつと、トイレは後でチェックしようと言って、結局は忘れるでしょう。そしてメモ帳はポケットからスルスル脱走するでしょう。いざとなったときに警察バッジを

なくし、市民の前でポケットを探る情けない姿を見せることになるでしょう。

私が杉下さんになれない理由の二つ目は、人見知りだからです。初対面の人との私は、逃走中の脱獄犯の言動よりもぎこちないです。こんな私が職務質問など任されたらどうなるか。考えただけで頭痛に襲われます。例えば、「お前がやったんだろ！おらあ！」と叫ぶはずが、何も発声できずに私が黙秘することになってしまふでしょう。何なら、尋問を自己紹介から始めてしまふそうです。想像しただけで杉下さんの眉間のシワが見えます。職務質問でも相手に呆れられそうです。相手のお仕事を聞くはずが「あんた本当に警察？」と思われそうです。

このように、私のような人は、よほど努力しないと杉下さんにはなりません。イケイケ警察官になるはずがしょぼしょぼ警察官になる自信がありません。

夏休みの思い出

遠藤 さくら

私の父はベトナム人で、母は日本人です。私は生まれた時から、アメリカに住んでいます。母は家で、ベトナムの料理、と日本の料理作ってくれます。

一般的に日本人は静かで、アメリカ人とかベトナム人は声が大きいです。アメリカ人は、自分の意見をはっきり言います。料理面では、ベトナム人の方がいろいろなスパイス、ハーブを入れて、野菜、肉もいろいろな種類を使って複雑な味がします。アメリカの食べ物にはジャンクフードがいっぱいありますが、様々な文化の食べ物もあります。日本食はバランスがあつて優しい味がします。私は、日本の料理が一番口に合っているけれど、ベトナム側の人の家族のほうが親しいです。でも、友達になるときは、日本人でも、ベトナム人でも、ほかの国の人でも全く気になりません。友達と遊んでいるときは、どこの国なのかを考えたりすることはありません。

日本語は母と話したい時、ゆっくり日本語でおしゃべりをします。日本語は、落ち着いたときや退屈で暇なとき、アニメを見るときにも使っています。ベトナム語も同じだけど、あまり話せません。おばあちゃんや近所のお年寄りと話すときにベトナム語は便利です。

日本語を使うと、細かい感情や状況を伝えられます。英語より日本語は、うまく使えないけれど、こういう気持ちを伝えるのに便利だと思います。

私には、今、日本語があまり必要ではないけれど、習うのが大切だと思っています。大切なのは、家族ときちんとがついていたいし、私も母の文化を続けたいです。補習校を卒業したら、ちよつと忘れるかもしれないけれど、その時はもう一回、自分で漢字や苦手な部分をもう一回習いたいです。

#### 馬に乗って思ったこと

清水 毬華

サンクスギビングの休みに、家族みんなでメキシコに行きました。私と私のお母さんの二人でホースバックライディングをしました。私たちのリーダーは、カルロスという人で、私の馬の名前はテキーラ、お母さんの馬の名前は、マサパンというメキシコのキャンデーの名前でした。

馬に乗って、カルロスの後ろを歩いてみると、カルロスの馬が止まったとたんに私の馬も全然動かなくなり、自分で立ち止ったままで道端の草木をむしるように食べたりしました。私の馬が立ち止まって草を食べていると、突然カルロスが私とテキーラの真後ろに馬に乗ってやって来て、「テキーラ、テキーラ」と叫ぶと、テキーラは食べるのをやめて、急に速足のトロットを始めました。私は今まで、普通のトレイルで前の馬について歩くだけだったので、少し退屈でしたが、この時初めて楽しいと感じました。

家に帰ってから、グーグルして調べてみると、馬の視界は三百五十度、つまり、真後ろを見ることができません。また、馬は音に非常に敏感な

め、突然大きな声や音が聞こえると、恐ろしく感じることを知りました。私は、もつと馬の習性を学んで、馬の行動を理解して、自分で馬の動きをコントロールして馬に乗れるようになりたいと思いました。

#### 感謝のサンクスギビング

季村 嶺生

毎年サンクスギビングになると、僕の家族は、母の親友のデイと一緒にごちそうを食べます。デイは、手作りのおいしいふわふわのパン、いんげん、芽キャベツ、マッシュポテト、そして、ケーキを作ります。母は、ターキー、スタッフィング、とうもろこしのプリン、クリームほうれん草、スイートポテトのキャセロールとグレイビーを作ります。僕の家族は毎年サンクスギビングの前日に、有名なパイのお店に行つて、長い行列に並んで、パンプキンパイ、チョコレートパイ、そして、僕の大好きなチェリーチーズケーキパイを買います。

これだけでも十分食べ物があると思うけれども、今年は、僕の大好きな料理の一つ、マカロニチーズを作りたいと思いました。僕は、マカロニチーズのレシピをいろいろ調べました。すると、チーズに「クエン酸ナトリウム」という化学薬品を入れると、チーズがとてもなめらかに溶けることが分かりました。クエン酸ナトリウムは、乳化剤として働き、チーズを温めるときに、タンパク質が固まりになったり、脂が分かれてベタベタの油っぽい状態になるのを防ぎます。そこで、その方法をためしてみることになりました。

クエン酸ナトリウムを取り寄せ、チーズソースに入れてみました。そのソースはとてもなめらかでクリーミーで、パスタにかけて仕上げると、おどろくほどおいしくできました。

クエン酸ナトリウムを使って、なめらかなチーズソースを作ることがうまくいって、その仕組みの科学を学ぶことができて、とても嬉しかったです。こんなに小さな発見でも、毎日の生活が少しでも楽しくなれることに感謝しています。

また、おいしいごちそうを食べられて、サンクスギビングの休みに、家族や友達と一緒に過ごせたことにも感謝しています。サンクスギビングのときだけでなく、毎日、感謝できるようにしたいです。

## ホワイトサンズ旅行

宮下 晴琉

今年のサンクスギビングは、家族でニューメキシコ州にあるホワイトサンズ国立公園に行きました。旅行当日、朝早くから準備をし、車で空港へ向かいました。一時間ほどで飛行機に乗ってニューメキシコ州に着き、車でホワイトサンズ付近へ移動しました。

二日目に、朝九時からホテルを出て、ホワイトサンズに向かいました。僕は、ホワイトサンズの白い砂の触り心地はどのような感じなのか、どのくらい冷たいのか、わくわくしていました。ホワイトサンズに着いた時の気温は、寒くありませんでしたが、手で砂を触ってみると、サラサラして冷たく感じました。長い時間素足で歩いていると、自分の足が凍りそうになり、すぐに靴下を履きました。白い砂の丘の上へ登ってみると、白い海のような景色がどこまでも広がっていました。アメリカに来て、こんなに白い砂のある場所は、見たことがありませんでした。アメリカでどのような天候が起きて、このようになったのか不思議に思いました。調べてみると、ホワイトサンズ辺りの地域に、昔あった海の塩分が石こうとして堆積し、かつては海だったこの場所から水が蒸発して結晶化しました。さらに、砂漠化と地殻変動、風と天候の働きによって、石こうが細かく砕かれ、現在の白い砂漠が形成されたということが分かりました。また砂の冷たさは、石こうが太陽光を吸収せずに反射するため、触っても熱くない特徴があることが分かり、とても興味深かったです。

僕は、ソリで砂の丘を滑ってみました。坂が急だったので、かなりの速度が上がり、怖い思いもありましたが、とても爽快感がありました。一度ホテルに戻った後、夕方にまたホワイトサンズへと向かいました。ホワイトサンズに着くころには、人が多くいました。なぜなら、夕方のホ

ワイトサンズは、絶景スポットとして、人気があるからです。夕日がだんだんと沈んでいくと、夕日の光で砂の色が、赤、オレンジ、黄色、紫と変わっていく、今までに見たことがないくらいきれいな景色を見ることができました。僕は、家族といたい思い出を作れたと思います。そしてこれからも、家族で世界のいろいろな自然と触れていきたいなと思いました。

## 戦争と人々

榊原 里紗

私は「おとなになれなかった弟たちに……」を読んで、お母さんが初めて泣いたというシーンが一番心に残りました。このシーンは、作者の弟で、赤ちゃんだったヒロユキが栄養失調で死んで、棺に納められる時、実はその棺よりも大きくなっていたヒロユキを見て、お母さんが思っていたよりも成長していたのだね、と涙を流したシーンです。なぜに残ったかという点、お母さんはそれよりも悲しいことや悔しいことがたくさんあったはずなのに、それまでは泣いていなかったからです。

私は、お母さんは決してうれしくて涙を流しているのではないと思います。大きく成長していたのに満足に食事を与えられなかったことを考えているのではないかと思いました。だからこそ、私は作者であるヒロユキの兄がひどいことをしたのだなという暗い気持ちになりました。作者は、ヒロユキは赤ちゃん、やぎのミルクや缶のミルクしか食べ物がないことがわかっていたのに、それを何度もぬすみ飲みしていたのです。お母さんはそれを知らなかったのかもしれない。けれども、作者はヒロユキのことが大好きだったので、それはがまんするべきだったと思います。

また、私はこの本の中に、カタカナで表記されている言葉があることを疑問に思いました。それは「ヒロユキ」「ヒロシマ」「ナガサキ」です。カタカナに意味があるのかなと不思議に思っていたのですが、人々が亡くなった場所と亡くなってしまった人々を強調するためにそのような書かれているのだと思います、とても特徴のある部分だと感じました。また、

タイトルもとても特徴的で、作者には弟は一人しかいなかったのに、「弟たち」と書かれています。それらを考えると、私は作者が言っているのは自分の家族のことだけではなくて、戦争を経験した人たちのことを物語に書きたかったのではないかと考えました。「ヒロシマ」や「ナガサキ」で原爆が投下されたときの時代に生きていた人々、たとえば「ヒロユキ」や作者の他の家族たち、それ以外の人々のことを書いているのだと思います。

母親が満足に食べられず、赤ちゃんにお乳を飲ませることができなかったことも、住んでいた場所から疎開しなければならなかったことも、ヒロユキが栄養失調で死んでしまったことも、空襲の爆撃で死んでしまった人がいたことも、戦争に行っていて一度もヒロユキの顔が見られなかった父も、ヒロユキのミルクをぬすみ飲みしていた僕も、その時代、いるいるなところで同じようなことが起こっていた、ということなのだと思えました。

毎年、戦争について学んでいます。いつ読んでも、戦争は悲しい、戦争はもう起こってほしくないと強く思います。もし自分が戦争を経験していたら、とても怖がっていると思います。そして、何も食べ物がいない状況を想像すると、作者がしてしまった「ぬすみ飲み」のような行動は、本当はしてはいけないことだと分かっているにもかかわらず、どうしてもほどう苦しい状況だったのだと思います。そうした経験をしたことがない、今の自分が置かれている環境に感謝しています。

### サンクスギビング旅行

藤野 桜

私はサンクスギビングの休暇に三泊四日でニューヨークに行ってきました。人生初めてのニューヨークですごくワクワクしていました。印象に残っているものを五つ紹介します。

一つ目は、タイムズスクエアです。朝、昼、夜と全部行ってきました。朝も昼も夜も、画面が想像以上に大きく、たくさんありびっくりしました。

た。特に夜は空が暗かったので、画面からの光が強く一番迫力がありました。タイムズスクエアの近くはいつも人混みで、寒いのに暖かく感じました。そして、すごく有名な場所なんだと改めて思いました。

二つ目は、「ロケッツ」です。ロケッツの舞台を見るとき、ラジオステーションというところに行くのですが、クリスマスが近いので通り道にはクリスマスツリーがあったり、イルミネーションで町全体が光ってすごきれいでした。ショーが始まると、観客席の天井まで演出があり楽しめました。ロケッツのダンスがすごくキレイで、三十六人が一人になったような感じですが、すごくカッコ良かったです。定番のクリスマスソングが流れていて時間が過ぎるのが早かったです。

三つ目は、美術館です。世界三大美術館のメトロポリタン美術館に行ってきました。そのあとに、モアというもう一つの美術館に行ってきました。どちらにも、ゴッホやピカソなどの有名な画家の絵がたくさんありました。絵だけではなく、写真や現代アートの空間もあり、アートの幅広さを実感しました。

四つ目は、クルージングです。四つの船でニューヨーク川とニュージャージー川のどちらにも眺められるクルーズに行きました。人生初めて、自由の女神やエンパイア・ステート・ビルなどの有名な建物を見ました。自由の女神は、教科書や画面越しでしか見たことがなかったので、実際に見られた時はうれしかったです。しっかり写真も撮って思い出として持ち帰りました。

五つ目は、グランドセントラル駅です。駅に入った瞬間、外の雰囲気とは違って感じました。下に下るにつれ、どんどんオシャレ感が増していき、映画に出てくるような駅でした。広場らしいところには、すごく広い高い大きな天井には星座が書かれていてすごきれいでした。

サンクスギビングでニューヨークに行き、すごく貴重な体験をしてうれしかったです。絶対に忘れられない旅行になりました。

失いたくないもの

銘田 夏音

サンIIテグジュペリの「星の王子さま」は飛行機乗りの「僕」が違う星から来たという不思議な男の子、王子さまと出会う物語です。私にとって、この本を読むのは初めてではなく、高学年のときに一度読んだことがあります。名作だと知り読んでみましたが、内容が難しく感じ、あまり印象に残らずじまいとなつてしまったのです。しかし、この本が何年も多くの人々に愛されている理由がどうしても知りたくなり、数年たった今、再び読んでみることにしました。

この本を読み直し、前回あまり印象に残らなかったことが信じられないくらい、全てのセリフや場面が今の私の心に響きました。大人に対する皮肉や個性的な登場人物たち、王子さまの風変わりな考え方など、全てが魅力的でした。その中でも私が特に好きなのは、物語にただよう不思議な雰囲気です。おもしろいのに切なくて、悲しいのに温かい気持ちになって、たくさんの感情が混じり合うことが心地よくさえ感じました。ふわふわしていて絵本のような語り口なのに、哲学的なことが散りばめられていて、すごく考えさせられる一冊でした。「なつかせる」とはどういうことなのか、「はかない」とは何か、普段私たちが何気なく使っている言葉に、王子さまは疑問を持ちます。わからないことをわからないと素直に言い、疑問に一つ一つ向き合って理解していく王子さまの姿は、純粹で素敵だと思いました。

心に残る名言や文章、場面が数えきれないほどあるのもこの本の魅力的どころです。特に、キツネが言った、「いちばんたいせつなことは、目に見えない」にはハッとさせられました。物事を目に見えるもので判断するけいこうがある私にとって、このセリフはとても印象的でした。本当に大切なのは目に見えるのではなく、絆や愛情など目に見えないものなのだと知り、これからは心で見えることを意識したいなと思いました。他にも「おとなだつて、はじめはみんな子どもだったのだから。(でもそれを忘れずにいる人は、ほとんどいない)」がお気に入り文章です。母や先生などもみんな、昔は子どもだったのは当たり前のことだけれど、

忘れてしまいがちです。この本に出てくる大人たちは数字や地位ばかり気にして、子どもの頃の想像力や純粹な心を失っているように思えました。私は大人になつても、自分にとって大切なものを見失わないように生きていきたいです。

以前「星の王子さま」を読んだときは、作者が伝えたいことがよくわからなかったけれど、今回読んでみて私なりに理解ができたと思います。自分では気づけない成長を、本を読むことで感じることができました。数年後にまたこの本を読んで、今の私から、今後どのように受け取り方が変化するか、楽しみです。